

食品ロスを笑顔に変える

家庭や食品企業などで余った食料を、経済的に困窮している人たちに届ける「フードバンクぬまた」。所管のNPO法人利根沼田地域ボランティアセンター「ごったく広場」の真下淑恵さんは、「食品ロスの削減で、環境負荷の軽減と困窮者支援につなげたい」と活動を進めています。



NPO法人
利根沼田地域ボランティアセンター
真下淑恵さん 戸鹿野町

同センターでは、利根沼田地域の家庭や企業から善意で寄付された賞味期限内の米や飲料、レトルト食品、缶詰など2世帯分の食料を常備。その他は保健福祉センター内の倉庫で期限ごとに管理し、足りなくなると補充します。市社会福祉課に相談に来た困窮者へ配布しています。

近年では、コロナ禍での経済活動の自粛の長期化により、生活が苦しくなった家庭に食料品が配られるようになっていきます。利用者は後日、「助かりました」とお礼を言い訪れ、切迫した状況を免れ安堵しているといえます。

米国では40年ほどの歴史のあるフードバンクは、日本では2000年以降から各地で設立され始め定着しつつあり



写真右) 食品ごとに収納する、センターボランティアスタッフの田中博さん 左) センターは使用済み食用油の回収も行い、資源の再利用を進めている



ます。もともと同センターは小規模でフードバンクの活動をしていましたが、2019年に市と社会福祉協議会が連携し、三者で事業を開始。各種催事などではブースを設け、積極的に食料品寄付の受け入れに当たっています。

真下さんは「提供者の皆さんには、食品ロスの歯止めに貢献できると思っています。生活困窮者支援の観点からも重要性が高まり、寄付は年々増えています」と感謝。これからも「もったいない」から「ありがとう」に換える活動を広げていきます。

生ゴミ処理機

悪臭少なくごみ量半分

温風で生ごみを乾燥させ、悪臭の発生を抑制。生ごみのかさと重さは減り、力を入れると崩れてしまうほどの感触に変わります。市内在住の鈴木茂さんは「夏場の臭いが軽減して快適」と話します。

鈴木さんは妻と2人暮らし。生ごみの量が少ないにも関わらず、夏場、ごみ箱を開けたときの悪臭に悩まされてきました。

1年前、家庭ごみの減量や堆肥化、悪臭防止などをうたう生ごみ処理機がテレビで紹介されており、鈴木さんは臭いの軽減を期待してテレビショッピングで購入。夕食後の生ごみを試してみました。使い方は簡単で、生ごみを集めたバスケットをセットし、一晩で乾燥。嫌な臭いや虫に悩まされることがなくなり、処理後は可燃ごみとして、今までよりもさらに少ない量のごみを快適に出しています。



生ごみ処理機購入費助成利用
鈴木茂さん

ごみ減量の取り組みとして、市は家庭用の生ごみ処理機購入に対する助成を実施。

鈴木さんのように人数の少ない家庭や単身でも、コンパクトでキッチンになじむ外觀や機能性を持つ生ごみ処理機が人気といえます。堆肥にして活用する人も増えています。

電気代抑制のために、鈴木さんは臭いが少ない冬場は生ごみ処理機の使用回数は減らすなど、時期やごみの量に応じて使っているとのこと。調理する量や買い物量を考えるようになりました」と、食品ロス削減につながる消費行動も見直すようになったといえます。

生ごみ処理機
購入費の助成はこちら

